

# 平成 30 年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

環境省(提案団体から改めて支障事例等が具体的に示された場合等に調整の対象とする提案)

管理番号

90

提案区分

B 地方に対する規制緩和

提案分野

環境・衛生

提案事項(事項名)

「犬」に対する二重規制の緩和

提案団体

埼玉県、秩父市、所沢市、小川町

制度の所管・関係府省

厚生労働省、環境省

求める措置の具体的内容

一部の動物取扱業者が二重規制を強いられている状況を解消するため、化製場等に関する法律施行令第1条から「犬」を削除すること。

具体的な支障事例

【現行制度】

化製場等に関する法律は、獣畜の肉、皮等を原料として肥料、皮革等を製造するために設けられた施設等に対し、公衆衛生の保全を目的とした規制を課している。

化製場等に関する法律第9条に基づく知事指定地区内の「動物の飼養又は収容の許可等」については、「犬」を扱うペットショップ等「動物取扱業者」も許可が必要となる場合がある。これは、化製場等に関する法律施行令により定められている許可が必要な動物に「犬」が含まれるからである。なお、他に許可が必要な動物は牛や馬などの家畜であり、一般的にペットショップ等で販売されている「猫」や「うさぎ」などは含まれない。

動物取扱業については、動物の愛護及び管理に関する法律により都道府県に登録等を行わなければならないが、化製場等に関する法律と同趣旨で規制が行われている。

【制度改正の必要性】

一部の動物取扱業者のみ二重規制を強いられている状況であることから、化製場等に関する法律施行令第1条から「犬」を削除することを求めるものである。

【懸念の解消策】

動物の愛護及び管理に関する法律には衛生面や生活環境の保全義務があり、化製場等に関する法律が目的とする公衆衛生の保全についても担保可能である。

制度改正による効果(提案の実現による住民の利便性の向上・行政の効率化等)

動物取扱業者にとっては、化製場等に関する法律に基づく許可と動物の愛護及び管理に関する法律に基づく登録の二重規制が解消され、負担軽減に繋がる。

また、県にとっても事務負担の軽減となり、動物の愛護及び管理に関する法律に基づく指導等に専念することができる。

根拠法令等

化製場等に関する法律第9条、化製場等に関する法律施行令第1条、動物の愛護及び管理に関する法律第10条

追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例（主なもの）

福島県、新潟市、大阪府、徳島県、高松市

○動物の愛護及び管理に関する法律で定める第一種動物取扱業又は第二種動物取扱業の事業者は、飼養施設において「犬」を取り扱う場合に、化製場等に関する法律が定める一定の条件を満たすとき、「動物を飼養又は収容する施設」の許可を併せて取得する必要がある。このことが、事業者にとって2重の規制となり、過分の負担となっていることから、化製場法の当該許可について、動愛法に基づく「第一種及び第二種動物取扱業者」をその対象から除外する措置が妥当である。

○本市においても、「犬」に対する二重規制の緩和がなされれば同様の効果が得られると考える。

本市では生活衛生課と動物愛護ふれあいセンターの2課にて化製場と動物取扱業の監視・検査等を行っているが、化製場等に関する法律に「犬」が記載されているため、対象の21施設中17施設が重複している。また、生活衛生課と動物愛護ふれあいセンターの窓口が離れており、業者負担や届出不備が生じている。

今回の規制緩和案により、重複している事務を分けることによる事務負担の軽減や、業者負担の軽減につながることを期待する。

○化製場法施行令で定める動物のうち、動愛法による規制を受ける施設にとって二重規制となる。また、個人の愛玩動物に対する規制にもつながり、過度な負担となる恐れがあるため、緩和すべきであると考ええる。

○提案自治体と同様の支障が生じているが、次のとおりすとなおよいと考える。

「犬」を除外するのではなく、「動物取扱業者」を除外対象とする。

理由

「犬」を除外してしまうと、10頭以上の犬を飼養している一般飼い主も化製場等に関する法律の規制対象から外れてしまうため。

補足

なお、動物取扱業者を畜舎の許可対象から除外する際には、畜舎の許可基準は各自治体の条例で定めていることから、動物取扱業者に対する規制内容が、現在の各自治体の条例の畜舎への規制内容を十分にカバーしている必要がある。

○犬については、動物の愛護及び管理に関する法律により「愛護動物」として規定され、動物取扱業への規制の他、周辺環境の保全等、一般の飼い主の責任も明記されていることから、化製場法第9条、同法施行令第1条から除外いただきたい。

# 平成 30 年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

環境省(提案団体から改めて支障事例等が具体的に示された場合等に調整の対象とする提案)

管理番号

158

提案区分

B 地方に対する規制緩和

提案分野

消防・防災・安全

提案事項(事項名)

自然公園法施行規則における第二種特別地域での行為の許可基準の緩和

提案団体

三豊市

制度の所管・関係府省

環境省

求める措置の具体的内容

災害発生等の緊急時に市民の安全を確保するために、デジタル防災行政無線設備を整備する場合については、通常の許可基準に特例を認め、必要最低限の設備については許可されるよう基準の緩和を求める。

具体的な支障事例

自然公園法第 20 条第 3 項により、国立公園内において一般建築物の新築を行う場合には環境大臣の許可を受けることとなり、同条第 4 項には環境省令で定める基準に適合しない場合には許可をしてはならないこととなっている。

本市ではデジタル防災行政無線設備の整備事業としてアンテナの設置を検討しているが、本市の地域の特性上地形は南北に長く、半島及び島嶼部もあるために基地局(中継局)を標高の高い場所に設置し、かつ3箇所整備しなければ市内全域を網羅することができず、本市においては第二種特別地域以外に適当な建設予定地がない。

しかし、上記地域に設置しようとする場合、自然公園法第 20 条第 3 項により、環境大臣の許可が必要となるが、その許可基準では建築物の地上部分の最高部が 13m以下と定められているため、周辺の地形等を考慮し有効なアンテナ設置位置を計画したが、上記基準を遵守することができないために、省令の基準内である 13m以内に計画変更した。計画変更により、今回は代替地の標高が当初予定地より高い場所であったために問題はなかったが、低い場合は通信機能に支障が生じる恐れがある。

制度改正による効果(提案の実現による住民の利便性の向上・行政の効率化等)

デジタル防災行政無線設備が促進され、市内全域で防災通信が可能となり、災害発生等の緊急時に市民の安全の確保に資する。

根拠法令等

自然公園法第 20 条第 3 項、同条第 4 項及び自然公園法施行規則第 11 条第 2 項

追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)

山口市、広島県、愛媛県

○自然公園内に、必要な手続きを経て通信設備を設置している箇所がある。現在、具体的な支障事例が無いが、同様の制度改正の必要性等が認められる。

○本県では、すでに国立公園内に建設している中継局があるが、今後、電波法の改定などにより、新たに国立

公園内への中継局の増設も考えられる。防災行政無線設備は災害発生等の緊急時に県民や市民の安全を確保することから、提案に賛同する。

# 平成 30 年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

環境省(提案団体から改めて支障事例等が具体的に示された場合等に調整の対象とする提案)

管理番号

237

提案区分

A 権限移譲

提案分野

環境・衛生

提案事項(事項名)

国立公園の管理に係る地方環境事務所長権限の移譲

提案団体

関西広域連合

制度の所管・関係府省

環境省

求める措置の具体的内容

国立公園の各区域内の行為許可権限、立入認定権限等の地方環境事務所長権限(連合域内の山陰海岸国立公園)について、関西広域連合への移譲を求める。

具体的な支障事例

法定受託し府県を經由している地方環境事務所長権限案件の場合、景観回復のための樹木の伐採といった軽微な案件にも関わらず、処理期間が1~2ヶ月程度かかるなど、事務処理に時間を要している。  
この点について、設立から7年が経過し、広域環境保全を含む7つの分野事務などあらゆる政策課題において連携と調整の実績を積み重ねてきている関西広域連合であれば、これらの課題を解消し、円滑かつ効率的な処理が可能である。  
したがって、国立公園の管理に係る地方環境事務所長権限を関西広域連合に移譲すべきである。

制度改正による効果(提案の実現による住民の利便性の向上・行政の効率化等)

国立公園の特別地域、特別保護地区、海域公園地区の各区域内における行為の許可権限、利用調整地区の区域内へ立ち入りを制限されている期間内に立ち入ろうとする場合の認定権限、普通地域の届出受理権限等(地方環境事務所長へ委任されている各権限に限る。中止命令、報告徴収、立入検査を含む。)については、一定の限られた範囲内の軽微な地方環境事務所長権限の案件であり、国立公園の保護と適正な利用の推進を適切かつ迅速に処理する観点から、開発と保護のチェック&バランスを確保した運用をすべきであり、総合行政を担う地方公共団体が処理することにより、地方環境事務所長が担うよりも、効率的に処理できるばかりか、保護と利用の適切な推進に資する。

特に、観光客を国立公園に呼び込もうと商業施設の開設規制を緩めようとしており、観光行政を担う地方公共団体が処理することにより、迅速、かつ、保護と利用のバランスを考慮した効率的・効果的な対応が可能となる。

なお、許認可事務の執行については、地方公共団体が実施している他の許認可と同様、環境省における許可に関する審査基準や全国的・国際的な見地による環境省の技術的助言に基づき、適切に運用することは当然、可能であり、国が一義的に責任を負って行われる国立公園の管理を侵すものではない。

また、総合行政を担う地方公共団体が処理する意義は大変大きく、法定受託している府県では、保護と利用の適切な推進に係るきめ細かな対応と事務処理の効率化に大きく寄与している。

根拠法令等

自然公園法第 20 条第 3・6・7・8 項、第 21 条第 3・6・7 項、第 22 条第 3・6・7 項、第 23 条第 3 項第 7 号、第 24 条、第 30 条、第 32 条、第 33 条、第 34 条、第 35 条

追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例（主なもの）

—

—

# 平成 30 年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

環境省(提案団体から改めて支障事例等が具体的に示された場合等に調整の対象とする提案)

管理番号

238

提案区分

A 権限移譲

提案分野

環境・衛生

提案事項(事項名)

国定公園に関する公園計画の決定等権限の移譲

提案団体

関西広域連合

制度の所管・関係府省

環境省

求める措置の具体的内容

国定公園に関する公園計画の決定等権限について、関西広域連合への移譲を求める。

具体的な支障事例

国定公園の保全と活用をめぐる価値観の多様化やニーズは急速に変化しており、地域の環境保全の責任を担っている地方自治体のイニシアティブなしには充実した管理運営は望めない状況にある。しかしながら、現行の制度は、国が公園区域を指定し、公園計画を決定したうえで、当該計画に基づき府県が管理することとなっており、地方自治体の自主性・主体性が発揮しにくいものとなっている。

また、例えば平成 18 年に兵庫県が氷ノ山後山那岐山国定公園について湿原・草原が失われている地域の自然再生施設の追加等を行う軽微な計画変更を行おうとしたところ、事前協議から環境大臣への申出(平成 17 年 8 月 19 日)から決定(平成 18 年 8 月 1 日)まで約 2 年近く要したほか、現地状況の説明のために詳細な資料作成、調査等が必要とされたように、軽微な公園計画の見直しを躊躇せざるを得ない状況にあり、機動的な対応ができていない。

この点について、設立から 7 年が経過し、広域環境保全を含む 7 つの分野事務などあらゆる政策課題において連携と調整の実績を積み重ねてきている関西広域連合であれば、これらの課題を解消し、円滑かつ効率的な処理が可能である。

なお、自然公園を指定する主体が公園計画を決定する必要性はなく、公園計画を作るものが管理することで、より主体的で責任ある管理が可能となる。

また、関西広域連合に権限を移譲した場合であっても、自然公園法等の基準のもと公園計画決定することによりはなくなり、一定の国の関与を残す必要があるのであれば、同意を要しない協議などで対応できると考える。

制度改正による効果(提案の実現による住民の利便性の向上・行政の効率化等)

国定公園に関する公園計画の決定権限について、地域の特性や事情を熟知した府県への移譲を基本としつつ、複数府県に跨がる国定公園については、関西広域連合に権限を移譲することにより、構成府県の迅速かつ効率的な調整のもと、国定公園の適切な保護と利用促進、きめ細やかで、より高い水準の維持が可能となる。

根拠法令等

自然公園法第 7 条第 2 項、第 8 条第 2 項

追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)

—

—



# 平成 30 年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

環境省(提案団体から改めて支障事例等が具体的に示された場合等に調整の対象とする提案)

管理番号

253

提案区分

A 権限移譲

提案分野

環境・衛生

提案事項(事項名)

土壌汚染対策法に係る事務・権限の移譲

提案団体

関西広域連合

制度の所管・関係府省

環境省

求める措置の具体的内容

土壌汚染対策法に係る事務・権限のうち、指定調査機関の指定・監督のように府県域を跨ぐために地方環境事務所の権限となっているもの(一の府県域の場合は、府県の権限)について、関西広域連合への権限の移譲を求める。

具体的な支障事例

当該事務権限について、事業者の所在地等が府県を跨ぐ場合に国に権限が留保されている理由は「広域的な判断が必要であるため」と考えられるが、関西においては、府県・指定都市を構成団体とする関西広域連合があり、設立から7年間、関西の広域行政の責任主体として、7つの分野事務をはじめ、あらゆる政策の企画・調整の実績を積み重ねてきたところである。  
地方創生をより一層推進するためには、地方でできることは地方に任せるべきであること、前述の実績を踏まえれば円滑な事務の執行に支障は生じないことから、府県をまたぐ場合の権限を関西広域連合に移譲すべきである。

制度改正による効果(提案の実現による住民の利便性の向上・行政の効率化等)

関西においては、府県・指定都市を構成団体とする関西広域連合を設立しており、関西の広域行政の責任主体として、政策の企画・調整機能の実績を積み重ねている。当該事務権限の移譲が実現すれば、府県が実施している事務と広域連合に移譲された事務の整理・集約など役割分担を検討することにより、より効率的かつ効果的な執行体制を構築することが可能となり、国と地方の二重行政の解消及び事業者等の利便性の向上が図られる。

根拠法令等

土壌汚染対策法第3条第1項、第35条、第36条第3項、第37条第1項、第39条、第40条、第43条、第43条、第54条第1・5項、第56条第1

追加共同提案団体及び当該団体等から示された支障事例(主なもの)

—

—